

太田遺跡発掘調査概要

茨木市教育委員会

は し が き

茨木市には、先人達が自然を舞台として生活した跡や様々なドラマに伴って使われてきた文化財が今もなお埋蔵文化財として地中に数多く残されております。

太田遺跡もその中の一つであり、遺跡の所在する旧太田村付近には現継体陵である太田茶臼山古墳・太田廃寺・太田城、また旧西国街道が東西に旧村を横ぎり、その街道沿いには太田神社が鎮座しているところであります。

また、周辺にはまだ多くの出畑が残っておりますが、近年の住宅建設等による開発行為が絶え間なく行われているところでもあります。

本書は、そうした開発行為に伴う発掘調査の成果を記したものであり、これによって文化財に対する理解と知識を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申しあげるとともに、開発行為に対して文化財保護の立場から指導・調査を進めてまいる所存でございますので、多くの方々の一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

茨木市教育委員会

教育長 中平 敏

例 言

1. 本書は、茨木市太田丁目地内における、日本道路公団の職員宿舍建設に伴って実施した太田遺跡の発掘調査概要である。
2. 本調査は、茨木市教育委員会が日本道路公団大阪管理局の依頼により、茨木市教育委員会社会教育課文化財係・調査員宮脇薫（嘱託員）を担当者として実施した。
3. 発掘調査は昭和60年2月5日から昭和60年3月30日、また、整理は昭和60年10月22日から昭和61年3月15日までの間実施した。
4. 調査の実施と概要の作成にあたっては、松島仁・柳沢久義・福井良一・原山雅浩・松井喜志子・片之坂節子・桑原紀子・田中良子・早川博子・大戸井和江・上岐朱美・因千枝子・園分佐知子諸氏の協力を受けた。
5. 本書の執筆及び編集は、宮脇薫が担当した。

目 次

本 文

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の環境	2
第3章	層位と遺物の出土状況	4
第4章	遺構	5
第5章	遺物	12
まとめ	17

図 版

図版 I	調査地域
図版 II	周辺の遺跡
図版 III	調査区の位置図
図版 IV～V	遺構図(第I調査区)
図版 VI	遺構図(第II調査区)
図版 VII～XVI	遺構
図版 XVII～XIX	遺物

第1章 調査に至る経過

日本道路公団が、大阪府茨木市東太田二丁目に職員宿舎の建設を計画された。

この遺跡は、昭和48年、今回の計画地南側の共同住宅建設に伴い、大阪府教育委員会により調査され、弥生時代後期の遺構及び奈良時代の掘立柱建物跡が検出されている。また計画地の北側の住宅建設に伴い茨木市教育委員会が調査を実施し、弥生時代の竪穴式住居跡も検出されている。また、これより以前に北の東芝炭木工場の建設において弥生時代の遺物が出土したと伝えられている。

そのようなことからその付近は、弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である太田遺跡内であるので、茨木市教育委員会と日本道路公団と協議を行った。

協議を行った結果、計画の予定地内において、遺跡の確認及び遺跡の様相を明らかにするため昭和59年10月3日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、建設計画地全域に、盛土・耕土及び床土を含む無遺物層の下から約30cmの暗褐色土層の弥生式土器及び須恵器片、土師器片を含む包含層を検出した。

そのようなことから発掘調査が必要であると考えられ、茨木市教育委員会は日本道路公団と協議し発掘調査を実施した。

発掘調査は、今回の計画により、埋蔵文化財に支障が生じる範囲の宿舎建設地及び浄化槽の部分に限り発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和60年2月5日から開始して、3月30日をもって終了し、昭和60年10月1日から昭和61年3月15日まで茨木市立文化財資料館にて遺物整理作業を実施した。

第2章 遺跡の環境

太田遺跡は、茨木市の中央部の東端にあたり、高槻市と隣接するところに所在する。

地形的には、高槻市・茨木市にまたがっている富田台地の西側に位置しており、遺跡の西方には安威川が南北に流れている。また遺跡の西南部においては安威川と勝尾寺川と合流して、東南の方向に一本となり流れている。

その富田台地には、南の台地の先端部から西側の斜面にかけて西国観音霊場22番札所の総持寺を中心として総持寺遺跡がある。総持寺遺跡は、いままで数度の調査が実施されているが、いずれの調査においても小規模な発掘調査であり全容は、不明ではある。また三島小学校近くの調査では弥生時代の竪穴住居跡が検出されている。それらの調査により総持寺遺跡は弥生時代中期の時期に集落が開始されていると考えられ、その後、台地を中心として古墳時代の須恵器及び土師器も出土しており、集落としては古墳時代にもひき続き営まれていたと考えられる。また埴輪片の散布もみられることから古墳の存在も予想されている。最近の調査によれば、鎌倉時代から室町時代の瓦器を伴う掘立柱建物跡を推測される柱穴もみついている。柱穴が見つかった調査地域は、現総持寺境内に隣接しているところから、総持寺との関連が考えられるがはっきりしたことは不明である。今のところ総持寺遺跡は、国道171号線を境として太田遺跡と区別している。総持寺遺跡の北西端の位置に、猿水神社として有名な磯良神社が鎮座している。

太田遺跡の西北の茨木市城の前町には、地名からも分かるように、その付近に太田城があったと推定されている。

また当調査地の北東部の富田台地の台地上には、太田廃寺跡がある。太田廃寺の伽藍は不明であるが、明治40年に開墾中に舍利容器一具を納めた塔心礎が出土した。現在心礎は不明であるが測量図がのこされている。舍利容器の、直接容器は短形金盆、第一間接容器は短形銀鉢、第二間接容器は有蓋銅碗、第三間接容器は有蓋大理石櫃によってつくられたものが花崗岩製塔婆心礎の門柱座

中央の短形穴内より出土している。また付近には丸・平瓦も出土している。また略化蓮葉文様棟端飾瓦の出土もしている。

北には旧山陽道（西国街道）が東西に通っている。

その旧山陽道の北には、太田茶臼山古墳と呼ばれている古墳時代中期の全長226 m の前方後円墳である現継体天皇陵がある。その古墳の周辺には陪塚とみられる古墳が6基存在する。

現継体天皇陵の北には、鉄剣、鉄斧等の鉄器類が出土した石山古墳もある。

現継体天皇陵の西側、段丘外縁部に位置するところからナイフ形石器や多数のサヌカイト剝片が採集されている。

第3章 層位と遺物の出土状況

当調査区は、過去においてブロック工場が建設されており、その後、工場が解体され宅地として造成されたところである。遺構面においてもいくつかの造成前の建物によって基礎による攪乱がみられた。

層位としては、盛土が50～60cm、その下に約10cm薄く耕土が堆積している。耕土より現在の瀬戸物と呼ばれる陶磁器が出土している。部分的には耕土の堆積が認められないところもあるので、前述の建物等によって失なわれている。その下に床土（明黄色粘土層）約10cmの堆積が認められている。そして約15～40cmの暗褐色粘土層が堆積している。一部礫層が含まれる部分もある。包含層からは弥生時代後期の弥生式土器及び須恵器・土師器が含まれている。出土遺物はいずれも破片であり、含まれている遺物の量としては多くはない。

遺構は、柱穴・竪穴住居跡、溝・土塹及び第Ⅰ調査区の東半部に見られた石群である。東半部の石群の性格等は不明であり、その石群の範囲からは遺物が出土しなかった。

土塹においては出土遺物は少なく、破片の出土であった。

竪穴住居跡の遺物は、埋土よりの出土であり、いずれも破片である。また竪穴住居の床面の出土遺物はなかった。

溝の出土遺物は、溝の堆積が黒色粘土層の単一層の溝であり、黒色粘土層内からの出土物として須恵器・土師器が認められた。

今回の出土遺物は、前述の図-5の高杯をのぞいて破片である。



遺構検出状況

第4章 遺構

今回の調査は、宿舎部分を第Ⅰ調査区、浄化槽を第Ⅱ調査区として実施した。

また第Ⅰ調査区の南北を二分にして、東西を9mに区分して調査を行った。

第Ⅱ調査区は、全体を一つの調査区として調査を実施した。

第Ⅰ調査区

調査区の西部分は、前述の建物の建設により、地山が削りとられており部分的に低くなっている。

柱 穴

調査区の東の石群の地域をのぞいて、柱穴を検出した。柱穴は径20cm～40cmの円形のものがある。また一辺40cm～70cmの方形の柱穴もみられる。しかし柱穴と柱穴との関係を明らかにすることが出来なく、掘立柱建物跡としてとらえることが出来なかった。出土遺物は柱穴Ⅰの図-5をのぞいて、出土する柱穴においても、遺物は細片であり明確な時期は不明であるが時期としては古墳時代～奈良時代の掘立柱建物の柱穴であろうと考えられる。

竪穴住居跡Ⅰ

約 $\frac{1}{2}$ の検出である。西の南部分は攪乱によって欠失されている。一辺が5m 80cmの隅丸方形の竪穴住居跡である。埋土より弥生時代後期の上器が出土したことから弥生時代後期の竪穴住居跡である。深さ11cmであり、大きく削平されていると考えられる。

竪穴住居跡Ⅱ

約 $\frac{1}{3}$ の検出である。東側において土壌によって欠失されている。短辺が4m 70cm、長辺5m 30cm以上のやや長方形をした隅丸方形の竪穴住居跡である。竪穴住居の北の部分において、ベッド状の遺構の痕跡が認められる。床面において柱穴が認められたが、竪穴住居跡に伴うものの他に、他の時期の柱穴もあるものと考えられる。深さ23cm。竪穴住居跡の埋土より、弥生時代後期の上器が検出した。床面においては検出することが出来なかった。時期としては弥生時

代後期の住居跡であろうと考えられる。

竪穴住居跡—Ⅲ

約4%の検出である。住居跡の東側は土壌によって削りとられている。北東部においても、土壌によって床面において大きく削りとられている。しかし西南から南にかけて他の竪穴住居地とくらべてのこりが良く周壁の溝が検出することが出来た。また柱穴が認められたが、他の時期の柱穴も床面において検出したので住居跡に伴うものは不明である。深さ12cm。埋土より弥生時代後期の土器が出土した。床面においては土器を検出することが出来なかった。時期としては弥生時代後期の竪穴住居跡であろうと考えられる。

竪穴住居跡—Ⅳ

約4%の検出である。住居跡の東側は後の削平により、削りとられている。短辺が3m40cm以上、長辺が5m60cmの長方形の隅丸方形の竪穴住居跡である。床面においては、柱穴を検出することはできなかった。深さ25cm。埋土より弥生時代後期の土器が出土した。床面においては土器が出土しなかった。時期としては弥生時代後期の住居跡である。

以上竪穴住居跡を4棟検出した。いずれも検出した面は他の遺構面よりいくらか高い部分に検出されている。他の地にもあったと考えられるが後の時期において削平され、検出されることが出来なかったかもしれない。

竪穴住居跡—Ⅰをのぞいて、他の竪穴住居跡は方向がやや西にかたよっている。また埋土からの出土遺物が同時期であることから、同一時期あるいは同一グループの可能性も考えられる。

また竪穴住居跡—Ⅰは、他の竪穴住居跡Ⅱ～Ⅳと方向を異にするが、埋土より出土している土器は、同時期であるので、集落内においてのグループが異なると考えられる。

溝—Ⅰ

幅が25cm～35cmの狭い溝である。北から南へ、更に調査地区の南において西へ方向を変えている。何かを区画するような溝であると考えられるが調査地区の西側においても検出を予想したが検出されなかった。埋土は、黒色粘土層の

単一層である。溝の内と考えられる調査地区の西側においていくつかの柱穴が検出されたので、それらの掘立柱建物に伴うものの溝と考えられ、屋敷地を区画する溝とも考えられる。

石 群

調査地域の東半分において検出した石群である。石群は、拳大の大きさの石から、ひとかかえもする大きな石もあり、石の配置においても不規則なものである。

石郡の一部の地域において密集するところも見受けられる。

石群を検出した遺構面は、白色の細砂が約15cm堆積しており、その下層が黄色礫層になり、他の地区の遺構面と同一層をなしている。そのようなことから白色の細砂は、他からはこぼれてきた可能性を有する。

石材としては、近くの安威川河原に見受けられる川原石で、他の地域から運ばれてきた可能性は少ないと思われる。

またその石群は、廃絶した時期以後に不規則な状態で検出したものと思われる。それによって本来の姿は不明である。石群の調査区の北端に、少しではあるが、溝状になっており、調査区の中央部で広がり溝状態がなくなるような状態で検出した。それは、あたかも石群に水を取り入れる様な状態で検出した。その凹みに堆積した土層は、明黄褐色砂層であった。

石群の検出にあたり、白色砂層の上面、および白色砂層内においても、遺物が出土しなかった。

それらのことから、石群の用途、性格および時期は全く不明である。

土 壙—I

短辺の辺が1 m 40cm、他の一辺が3 m 以上、長辺が3 m 60cm以上の不規則な方形の土壙である。中央部の北の地山が削平されている状態で検出した。深さも4 cm～6 cmである。

土 壙—II

土壙—Iの遺構内で検出した土壙であり、短径が60cm、長径が1 m 30cm以上の楕円形をした深さ約5 cmの土壙である。

土 壙-Ⅲ

短径が1 m 40cm、長径が3 m、深さ約10cmの長楕円形をした土壙である。土壙の東の中央部を数個の柱穴により、切られた状態で検出した。

土 壙-Ⅳ

一辺が1 m 40cm、深さが5 cmの正方形に近い土壙である。

土壙-I・II・III・IVを検出したB・C-3地区は、地山の削平が著しく、遺構は浅く検出したが、本来はもっと深かったと思われる。

土 壙-V

短径60cm、長径2 m以上、深さ25cmの長楕円形土壙である。西側においては攪乱によって欠けている。

土 壙-VI

短径1 m 40cm、長径2 m、深さ47cmの半円形状の土壙である。土壙内においても3基の柱穴を同時に検出した。

土 壙-VII

短辺1 m 10cm、長辺2 m、深さ51cmの長方形の土壙である。南東の辺角のところにおいて円形の柱穴を切られた状態で検出した。底面は三段になって検出した。

土 壙-VIII

短辺1 m 30cm、長辺1 m 50cm以上、深さ36cmの不整形の土壙である。南側の半分近くが攪乱により欠けた状態で検出した。

土 壙-IX

短辺1 m 10cm、長辺2 m 10cm、深さ42cmの長方形の土壙である。土壙の北側において一部欠失した状態で検出した。

土 壙-X

短径1 m 80cm、長径2 m 30cm、深さ24cmのやや円形に近い楕円形の土壙である。床面の西南部において円形の柱穴を検出した。

土 壙-XI

長径2 m 10cm、短径2 m、深さ24cmの不整円形の土壙である。土壙の東半部

の底は二段になっている。

土 壙—XII

短径45cm、長径90cm、深さ14cmの長楕円形をした土壙である。土壙の南を土壙—XIIIで切られている。

土 壙—XIII

短辺90cm、長辺1m80cm、深さ37cmの長方形をした土壙である。土壙の東南部分が土壙—XIIにより切られている。

土 壙—XIV

短辺1m、長辺2m10cm、深さ51cmの長楕円形をした土壙である。底面二段になっている。土壙の南西部を円形および方形の柱穴により切られている。

土 壙—XV

短径1m60cm、長径1m30cm以上のほぼ円形に近い土壙である。床面に数個の柱穴が切り込まれている。

土 壙—XVI

短径80cm、長径2m、深さ27cmの長楕円形の弧形態の土壙である。

土 壙—XVII

短径2m、長径2m50cm、深さ51cmの楕円形の上壙である。土壙の西を竪穴住居跡—IIによって欠失した状態で検出した。土壙の東においては底面が二段になっており、西の部分で一段になっている。

土 壙—XVIII

短径70cm、長径2m20cm、深さ16cm、中央部が1m5cmと凸だした様な長楕円形をした土壙である。土壙の底面の南の部分に短径60cm、長径1m80cmの長楕円形をした土壙が切り込まれている。

土 壙—XIX

短径80cm、長径1m90cm、深さ24cmの長楕円形をした土壙である。

土 壙—XX

短径1m35cm、長径1m以上、深さ7cmの楕円形をしており攪乱により $\frac{1}{2}$ 以上欠失した状態で検出した。

土 壙—XXI

短径1m、長径1m 20cm、深さ6cmの円形に近い楕円形をした土壙である。

土 壙—XXII

短辺80cm、長辺90cm以上、深さ14cmの方形の土壙である。

土 壙—XXIII

短辺1m、長辺1m 45cm、深さ22cmの方形の土壙である。

土 壙—XXIV

短辺85cm、長辺2m 15cm、深さ22cmの方形の土壙である。

土 壙—XXV

短径70cm～1m 10cm、長径1m 90cm、深さ31cmの南半がふくらんだ状態の土壙である。須恵器甕（岡—8）出土。

土 壙—XXVI

短径65cm以上、長径2m、深さ54cmの長楕円形をした土壙である。攪乱により約1/2欠失した状態で検出した。

その他、B・C—6地区において、南北に幅25cm～45cmの二本の溝を検出した。その二本の溝のうち西側の溝は、調査区内において6mの範囲に検出した。南端部分は攪乱によって欠失している。東側の溝は、中央部の南の部分にあり同じく攪乱により欠失が認められた。北の部分においては、東へ折れ曲がった状態で検出された。いずれも2本の溝の堆積土が耕土であり、内より出土する遺物が現在の瓦および陶磁器であり、調査区のブロック工場は盛土する以前が田地であったということから、それに伴う暗渠の痕跡であると考えられる。

以上が第I調査区の概略である。土壙からは遺物の出土がなく、時期が不明である。

第II調査区

浄化槽に伴う発掘調査を実施した地区である。第I調査区の南に位置する。

竪穴住居跡—V

一辺4 m 90cm以上の隅丸方形の住居跡である。調査区の関係で一部の検出であった。のこり状態は良くなかった。深さ14cm。西では土壌—XXVII、中央部では土壌—XXVIII、東では土壌—XXIX で切られた状態で検出した。明らかに竪穴住居跡の埋土からは弥生時代後期の土器が出土した。

土 壌—XXVI

短径1 m 10cm、長径1 m 60cm以上、深さ8 cmの長楕円形の土壌である。中央部が深くなった舟底状の形態を示している。

土 壌—XXVII

短径70cm以上、長径1 m 20cm、深さ21cmの楕円形をした土壌である。

土 壌—XXVIII

短径80cm以上、長径1 m 80cm、深さ44cmの長楕円形をした土壌である。中央部が深くなった舟底をした土壌である。

柱 穴

調査区全体に柱穴を検出した。規模等は第I調査区と同様である。一部柱穴は、かさなった状態で検出した。

第5章 遺物

弥生式土器（中期）

甕 (1)

張りのある体部から外反する口縁部。端部は下方に拡張している。体部の内外面はあらい刷毛目で調整され、口縁部は端部を含めてナデて調整されている。

甕 (2)

体部の外面はあらい刷毛目で調整されている。

以上二点は畿内第Ⅲ様式である。

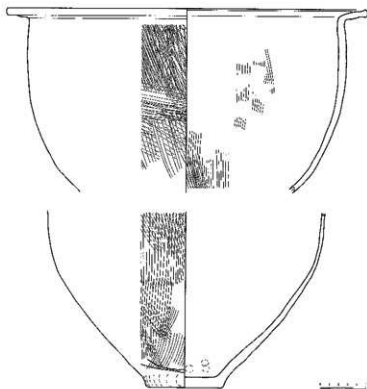


図-1 出土遺物 甕

弥生式土器（後期）

壺

口縁部の出土が少なく、（図-2）のような内彎してたち上がる頸部から強くひろがる口縁部。端部に面をもつ。

（図版-XVII）のような広口壺が出土している。口縁部は端部を含めてナベにより調整されている。体部はヘラミガキで調整されている。

（図-3）のように口縁部近くの体部上半にはあらい櫛描き波状文があるものもある。

鉢（図-4）

小さな平底に斜め上方にたち上がる体部に、直口する口縁部のものであり、表面の摩耗が著しいがタタキ目を外面にほどこしている。内面はナデであり、（図-4）は刷毛目によって調整されている。（図-4）のように穴のあいているものもある。

高杯（図-5）

（図-5）は杯部である。上端で外側に稜をつくり、外彎しながら斜め上方に強くひろくものである。端部はやや斜めに面をつくる。外面はナデのあとタテヘラミガキがなされており、内面はナデのあと横方向のヘラミガキで調整されている。

（図-5）は内彎しながら斜め上



図-2 出土遺物 壺



図-3 出土遺物 壺拓影

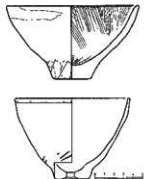


図-4 出土遺物 鉢

方にたち上がり、端部を丸く
 仕上げげる杯部と短くわずかに
 外にひらく脚部である。端部
 は丸く仕上げられている。内
 外面の調整は不明である。

(図-5)は外方にひらく
 脚部であり、端部は丸く仕上
 げられている。透し穴は4個
 であろうと思われる。

その他、脚部が出土してい
 るが、いずれも中空であり、
 わずかに外にひらく短いもの
 である。

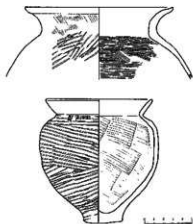


図-5 出土遺物 高杯

甕 (図-6)

(図-6-②)は体部から斜め上方に外反する口縁部に、最大径を中位にあたる短胴の甕であり、丸いような感じがする。外面はあらいタタキ目がほどこ
 ざされている。内面はあらい刷毛目で調整されている。

(図-6-①)は体部の上半から口縁部の破片である。体部から斜め上方に

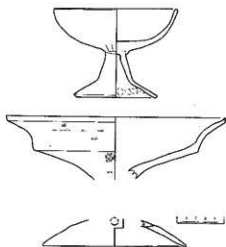


図-6 出土遺物 甕



図-7 出土遺物 甕の体部の拓影

外反する口縁部に、体部の外面はあらいタタキ目、内面は刷毛目で調整されている。

他に多くの体部の破片があるがいずれもあらいタタキ目に、内面は刷毛目、ナデだけのものもある。底はいずれも小さな平底である。

須 恵 器

須恵器は大きく、5世紀後半のものと7世紀後半から8世紀前半の二時期に分かれる。

杯蓋 (図版XVI)

天井部は全体に丸味をもち、ヘラ削りしている。天井部と口縁部との境界は突出して鋭い稜をなしている。口縁部は比較的高く、稜線から端部まで2.5 cmぐらいである。

甕 (図-8)

口縁部は朝顔形に外反し、端部は上下に稜をもつ。口縁端部ちかくに断面角形の凸帯をめぐらし、その下に櫛描き波状文をほどこしている。外面は平行叩き目文を残し、内面の叩き目は消している。

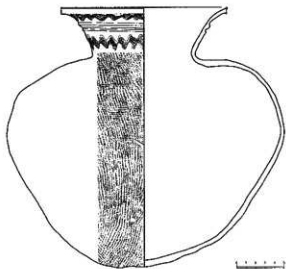


図-8 出土遺物 甕

以上が5世紀後半の時期の須恵器であり、その他いくつかの外面が平行叩き目がほどこされ、内面の同心円文叩き目が消されている甕の破片が出土している。

杯身 (図版 XIX-④~⑥)

杯身には底部に高台のつくもの (図版 XIX-⑤・⑥) と、つかないもの (図版 XIX-④) が出土している。

(図版 XVI-⑨) は、口径10cmの小型の杯で、外へ傾きながら上へのび、端部は丸くおさめている。

(図版 XVI-⑩) は、口径15cmの大型の杯で、形態は (図版 XVI-⑨) と変わりなく、高台はあまり高くなくてわずかに外方へふんばる。

その他高台のつく破片も出土している。

甕 (図版 XVII-⑧)

口縁部は外へ大きく外反している。端部は内傾した面をもつ。体部はわずかであるが平行叩き目が残っている。内面においても青海波の叩き目を残している。

以上がいずれも溝-I から出土している。時期としては、7世紀後半から8世紀前半の須恵器である。

ま と め

今回の調査により、今まで様子がわかっていなかった太田遺跡に対して、一つの資料を提供することが出来たと考えられる。

調査地の包含層から、弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）の甕が出土したことにより、太田遺跡は弥生時代中期の時期において、この地域の近辺に集落が営まれていたと考えられる。

つぎの弥生時代後期には、今回検出した遺構すなわち竪穴住居跡5棟でわかるように今回調査した地区を含めて集落を形成していたと考えられる。竪穴住居跡を検出した遺構面（地山面）は、他の調査区とくらべていくぶん高いところであることから、他の地区ではすでに削平あるいは攪乱により消滅したのも考えられるので、今回調査した地域においてもあといくつかの竪穴住居跡があったと考えられる。

今回検出した竪穴住居跡を伴う集落の立地としては、富田台地の先端ちかくの西斜面が下がった平坦面にあり、安威川の東岸の後背地よりは高いところに位置している。総持寺遺跡の中心地域と考えられる台地の先端の高台にあるのと様相を異にしている。しかし総持寺遺跡内においても三島小学校近くで検出した竪穴住居跡もあり、また今回の調査区の北側の調査においても竪穴住居跡が検出されており、時期としては今回の竪穴住居跡と同じく弥生時代後期で、台地の西のふもとに広く分布していたと考えられ、大きな集落が営まれていたと予想される。

包含層からの出土の土器も、竪穴住居跡の時期と考えられる弥生時代後期の時期のものを多数占める。その時期においても、丸底および甕においてであるが、庄内式と呼ばれる細いタタキ目、体部が薄手のものがまったく出土していないことから、弥生時代後期の前半から中頃であって、弥生時代後期の終わりから、5世紀前半までにおいては、集落は営まれていなかったと考えられる。

5世紀後半の時期には、土壘—XXV から須恵器甕（図—8）の出土で分かるように土壘が作られており、また包含層からも5世紀後半の遺物が出土して

いる。また、調査区の南において昭和42年の冬に島上高校地歴部の調査においても、石剣が出土していることから、付近には集落あるいは古墳等があったと考えられる。

7世紀後半から8世紀にかけての時期の遺構としては、くの字状に検出した溝—I内から(図版XXVI—⑧~⑩)の須恵器が出土しており、その時期であると考えられるので西半は検出することができなかったが、溝で区割された空間を検出したことにより、また、その内と考えられる西の地区において多くの柱穴を検出していることにより、その時代において集落があったと考えられる。

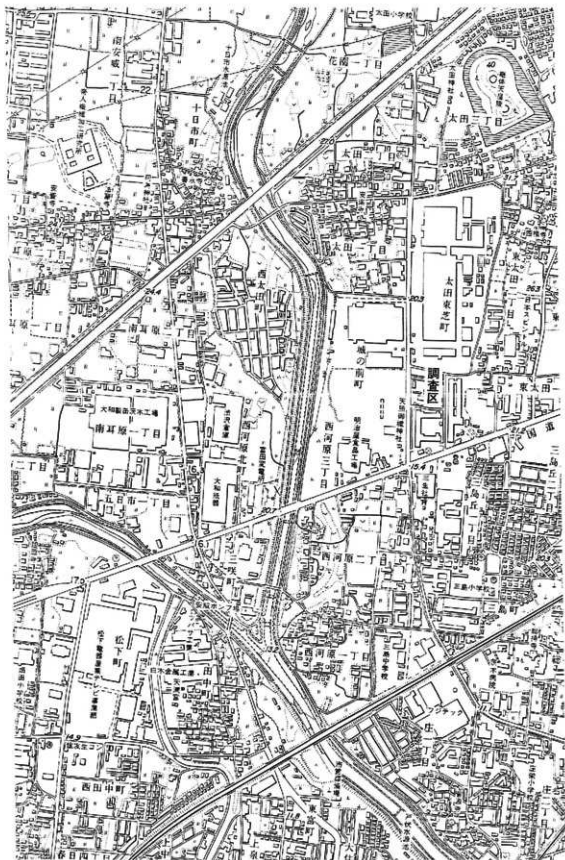
7世紀後半から8世紀前半にかけては、当地区のところには太田廃寺とも関係して、『播磨国風土記』揖保郡条の「摂津の国三島の賀美の郡の太田村に移り致りき」・『先代旧事本紀』景行天皇条に同天皇皇子の一人として「豊門入彦命(太田別祖)」と見られ、太田氏の本居地が付近にあったと推定される。『新撰姓氏録』摂津国神別には「中臣大田連、同神(天兒屋根命)十二世孫御身宿彌之後世」とあり、太田連が、太田から「御田・屯田」にもつながることから、その太田部を統率していたのが太田連であろうと考えられる。太田氏の本屋、あるいは関係した集落の一部である地域ではないかと考えられる。

その近くには式内社である太田神社も鎮座している。

最後に石群であるが、時期あるいは用途はまったく不明である。これから類例の資料をもって検討していこうと思っておりますので、多くの方々からの御教示あるいは御指導をお願いしたいと考えております。

圖 版

図版一 調査地域



図版II 周辺の遺跡



図版Ⅲ 調査区の位置図



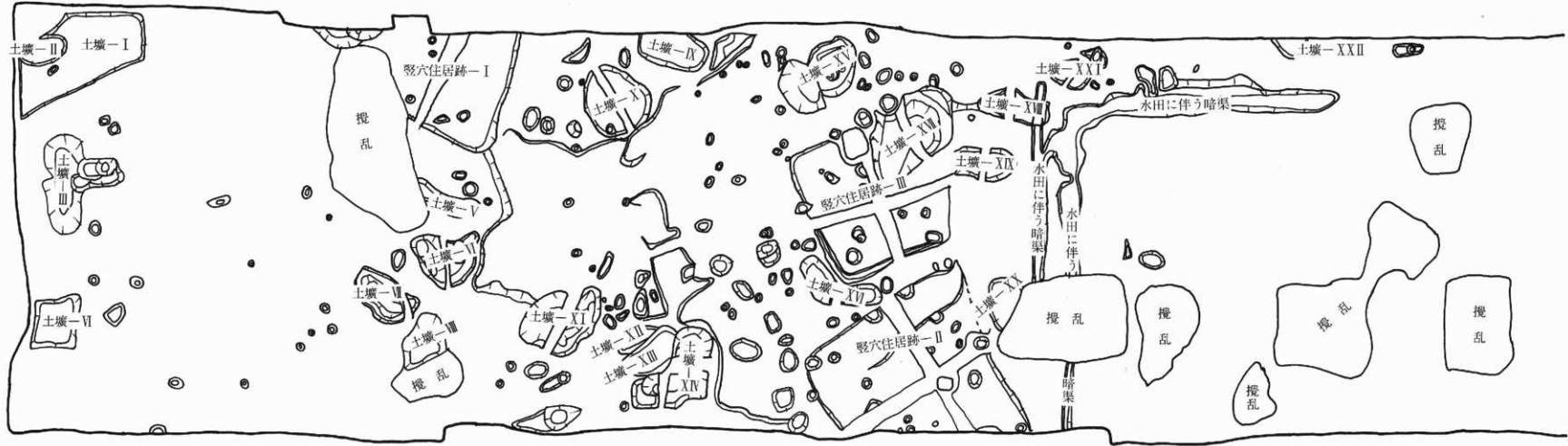
8LIN



—BLIN



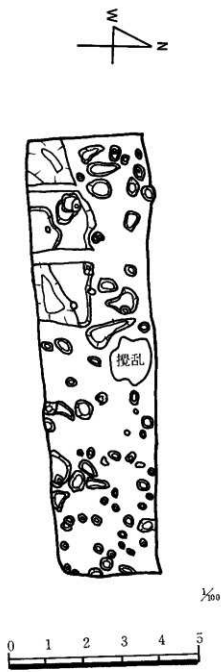
8LIN



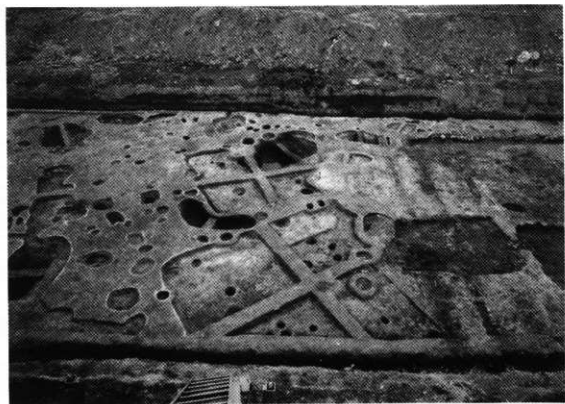
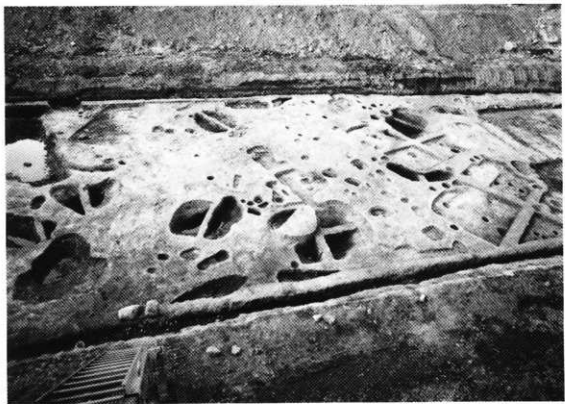
BLIN—



図版VI 追構図(第II調査区)













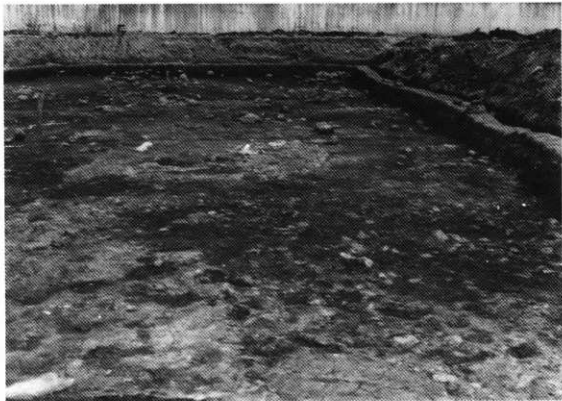




(西から)



(東から)





豎穴住居跡-Ⅱ・Ⅲ



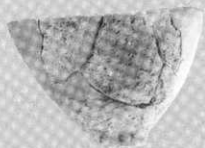
豎穴住居跡-Ⅳ



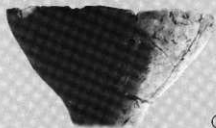
(西から)



(東から)



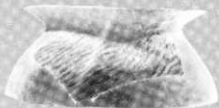
①



②



③



④



⑤



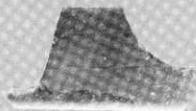
⑦



⑧



⑨



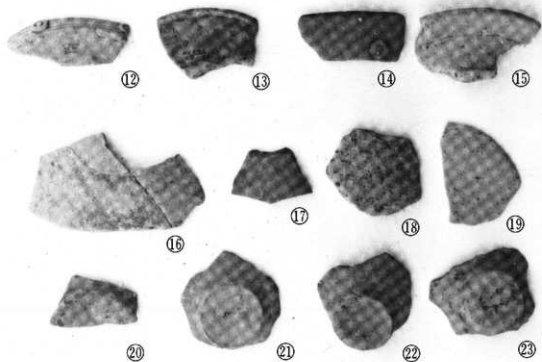
⑩



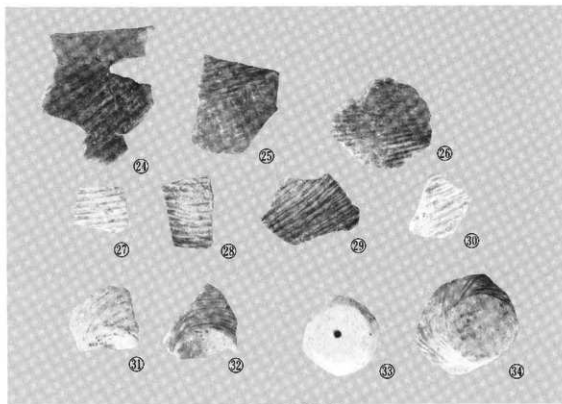
⑪



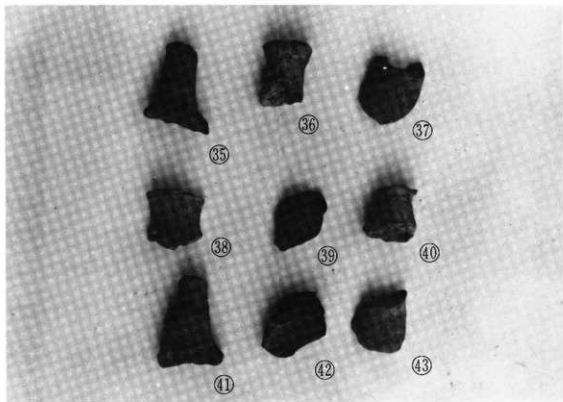
⑥



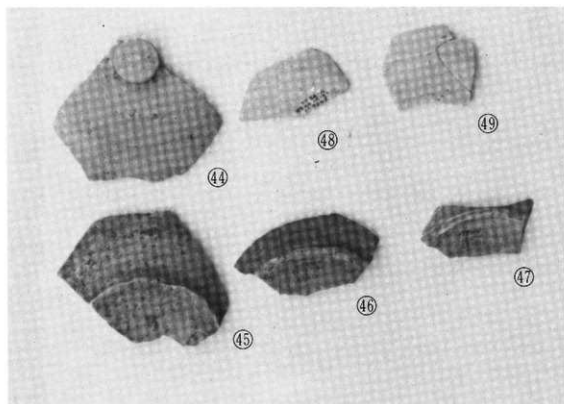
壺 (弥生時代後期)



甕 (弥生時代後期)



高杯 (弥生時代後期)



須恵器

太田遺跡発掘調査概要

昭和61年3月29日

発行 茨木市教育委員会
印刷所 政和印刷株式会社